「羽根の禿（はね　かむろ）」

（演目の説明）

　歌舞伎舞踊。長唄。

天明 5 年（1785）2 月、江戸桐座で三世瀬川菊之丞が初演した五変化所作事『春昔由縁英（はるむかしゆかりのはなぶさ）』のうち一曲が独立した作品です。作詞は初世瀬川如皐（せかわじょこう）、作曲は初世杵屋正次郎（きねやしょうじろう）、振付は二世西川扇蔵（にしかわせんぞう）が手掛けました。

（あらすじ）

　門松が飾られた新春の吉原の揚屋の店先であどけない禿が羽をつく様子を描いた、明るい曲想の舞踊です。羽根をつく振りには『娘道成寺』の鞠唄が使われています。

初々しく可愛らしい少女の浮き浮きした様子を表現するのが眼目です。

（衣裳の説明）

一、赤縮緬地（あかちりめんぢ） 薬玉縫（くすだまぬい） 玉子色羽二重小桜銀箔置附付（たまごいろはぶたえこざくらぎんはくおけつきつけ） 中振平袖禿着付（ちゅうふりそでかむろきつけ）

一、黒繻子地（くろしゅすぢ） 暴れ熨斗縫矢の字帯（あばれのしぬいやのじおび）

一、赤羽二重切箔置衿（あかはぶたえきりばくおきえり） 赤縮緬中振袖襦袢（あかちりめんちゅうふりそでじゅばん）

一、赤縮緬牡丹縫裾除（あかちりめんぼたんぬいすそよけ）

一、鴇縮緬（ときちりめん）しごき

一、赤縮緬（あかちりめん）丸ぐけ

今回展示した衣裳は、令和元年 8 月シアターコクーンにて、四代目市川ぼたんの襲名披露公演の際に、ぼたん丈の為に新しく制作された衣裳です。

華やかな薬玉の刺繍の中に大きな牡丹の花をあしらい、ぼたん丈の新たな門出に華を添える衣裳に仕上げました。

「外郎売（ういろううり）」

（演目の説明）

歌舞伎十八番の内のひとつ。

享保３年（1718）正月、森田座における『若緑勢曽我（わかみどりいきおいそが）』の中で、外郎売を演じる二世市川團十郎が、薬の由来や効能を語る自作の長台詞を、早口言葉で披露したのが始めとされています。因みに、外題にもある“外郎（ういろう）”は口や喉への効能がある丸薬のことで、“透頂香（とうちんこう）”とも呼ばれていました。二世團十郎は台詞術に優れ、長台詞を得意としていました。長台詞を流暢に喋るのは荒事の雄弁術（ゆうべんじゅつ）のひとつで、言葉による悪霊鎮めの意味を持っています。

歌舞伎十八番のひとつに選定された後、一時上演が途絶えていた本作を、大正 11 年（1922）9 月、帝国劇場で十世團十郎が常磐津（ときわづ）の所作事の様式で復活上演。

そして、昭和 15 年 5 月、歌舞伎座で十一世團十郎が九世海老蔵を襲名の折、『歌舞伎十八番の内　ういらう』と題して上演しました。

更に、昭和 55 年 5 月、十二世團十郎が野口達二の改訂台本で上演、荒事味をより強くした華やかな一幕となり、上演を重ねています。

（あらすじ）

富士の巻狩（まきがり）の総奉行となった工藤左衛門祐経（こうとうざえもんすけつね）が、大磯の廓で休息しているところへ外郎売が現れます。そして祐経の所望に従って、外郎の故事来歴や効能を弁舌鮮やかに聞かせます。ここが本作の見どころであり、また台詞の聞きどころです。

そして、外郎売が曽我五郎時政（そがのごろうときまさ）という素性を明かし、亡父の仇の祐経に挑もうとします。

ここから勇ましい荒事の芸を見せ、祐経と対峙する『対面』となります。

一方、祐経は五郎に巻狩の折の地割（じわり）の絵図面を与え、後日の再会を約束して幕となります。

（衣裳の説明）

一、薄納戸繻子地（うすなんどしゅすぢ）　宝尽くし縫散（たからづくしぬい）らし　黒八裾綿入東絡着付（くろはちすそわたいれあずまからげきつけ）

一、黒八（くろはち）　前平丸（まえひらまる）ぐけ帯（ぐけおび）

一、柿色繻子地（かきいろしゅすぢ）　注連縄（しめなわ）に紙垂（しで）　赤丸（あかまる）ぐけ紐付（ぐけひもつき）　袖無羽織（そでなしはおり）

一、赤縮緬地（あかちりめんぢ）　蝶（ちょう）散らし　薄綿入衿丸襦袢（うすわたいりえりまるじゅばん）

一、黒八巻衿（くろはちまきえり）

一、赤羽二重紐付（あかはぶたえひもつき）・手筒（てづつ）

一、白紬地（しろつむぎじ）　六弥太格子（ろくやたこうし）上締（うわじめ）

今回展示した衣裳は令和４年１１月歌舞伎座にて、十三代目市川團十郎白猿・八代目市川新之助の襲名披露公演の際に、新之助丈の為に新しく制作された衣裳です。

歴代の衣裳を踏襲しつつ、着物の地色は十三代目團十郎丈の要望により、今までよりも明るい色味に染め上げました。